

## 01-003

## 自閉症スペクトラム障害児の母親がとらえた感覚の特性による困難（2） 学校での生活場面

難波 知子<sup>1</sup>、森戸 雅子<sup>2</sup><sup>1</sup>川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科、<sup>2</sup>川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

## 【目的】

自閉症スペクトラム障害（以下ASD）は、DSM-5により再定義された診断名である。また、診断基準の詳細項目には「感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性、あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心」も追加された。ASD児の感じ方は、健常児の感覚と異なる上に、周囲に助けを求めることは極めて難しいとされる。日常生活上の負担軽減や介入研究も不足しており、学校生活場面においても同様である。そこで、本研究ではASD児の感覚の特性による学校での困難場面を整理し、支援側に必要な示唆を得ることを目的とした。

## 【方法】

本研究は研究者の所属施設の倫理委員会の承認を受けて実施した。対象は、筆者らのフィールドにおいて研究協力の得られた母親5名である。2014年9月～12月、感覚の特性にともなう家庭以外の場面における児の困難やその対処法について半構成的面接を実施し、逐語録を作成した。今報告では、学校生活における困難感を抽出し、体性感覚（触覚、運動覚）と特殊感覚（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、平衡感覚）の7つの感覚について場面別に整理した。

## 【結果】

児の属性は、全員が男子で小学生が3名、中学生が2名であった。感覚の特性による困難感、児の全員が呈していた。学校生活での困難場面は「学習面」「給食時間」「友達・担任との関係」「健康安全面」に整理できた。「学習面」では、日常生活とは光源の違う宿習学習に参加できない（視覚）、苦手な音のある授業が受けられない（聴覚）、遠足の場所のにおいが気になり一緒に行動できない（嗅覚）、水泳学習時のシャワーを浴びられない（触覚）があった。「給食時間」では、食べられないメニューがある（味覚）、臭いに耐えられないメニューの日は教室内で食べられない（嗅覚）。「友達・担任との関係」では、他者の顔の判別ができない（視覚）、軽い接触でも強い衝撃に感じて友達と接することを避ける（触覚）、友達やものとの距離感がとれない（運動覚）。「健康安全面」では、注意表示（立ち入り禁止や×マーク）を不快に感じて怒る（視覚）、転びやすい（平衡感覚）、自分がけがをしても痛みを感じにくい（触覚）などがあった。

## 【考察】

感覚の特性は学校での生活場面や人間関係に大きな困難と停滞をもたらしていた。学校関係者は、場面別に生じているASD児の感覚の特性による種々の行動を理解した上で、家族と協働した支援プログラムを調整する必要があることが示唆された。（科学研究費15K12730）

## 01-004

## 幼児期の気になる子どもの行動特徴と男女差

川越 奈津子<sup>1</sup>、郷間 安美子<sup>2</sup>、郷間 英世<sup>3</sup><sup>1</sup>長浜市教育委員会 幼児課、<sup>2</sup>京都国際社会福祉センター、<sup>3</sup>京都教育大学

## 【目的】

近年、「気になる子ども」の対応に保育者が苦慮している現状である。「気になる子ども」の特徴はこれまでも多くの先行研究の中でそれぞれに定義されてきたが、本研究では保育者への意識調査から「気になる子ども」を「目立つタイプ」と「目立たないタイプ」に分けそれぞれのタイプの中で男女差を比較し、その行動特徴を検討することを目的とした。

## 【結果】

（1）目立つタイプにおける男女差『注意・衝動性』で割合の高かった項目は、男児が「周りに刺激が気になり、話を聞いていない」120名（75.9%）、女児は「周りの刺激が気になり、話を聞いていない」23名（53.5%）であった。また、「落ち着きがない」「理由もなく手がでる」 $p < 0.05$ 、「周りに刺激が気になり、話を聞いていない」 $p < 0.01$ で有意差が認められ、男児の方が有意に高かった。『運動・操作』で割合の高かった項目は、男児が「椅子に座っているなど、同じ姿勢が保てない」97名（61.4%）、女児も「椅子に座っているなど、同じ姿勢が保てない」17名（39.5%）であった。また、「粗大運動が苦手」 $p < 0.05$ 、「年齢に比べ、手先が不器用」「椅子に座っているなど、同じ姿勢が保てない」「力の加減ができない」 $p < 0.01$ で有意差が認められ、男児の方が有意に高かった。（2）目立たないタイプにおける男女差『社会性』で割合の高かった項目は、男児が「自分の気持ちを言葉で表現することができない」43名（50.0%）、女児も「自分の気持ちを言葉で表現することができない」29名（53.7%）であった。『運動・操作』で割合の高かった項目は、男児が「年齢に比べ、手先が不器用」48名（55.8%）女児は「身体の使い方がぎこちない」43名（50.0%）であった。また、「年齢に比べ、手先が不器用」は $p < 0.01$ で、有意差が認められ、男児の方が有意に高かった。

## 【考察】

目立つタイプにおいては、男女とも注意・衝動性の課題が大きいが、その特徴は男児の方がより顕著に出ていた。目立たないタイプは、有意差が認められた項目は3項目のみであり、男児女児とも同じような姿を見せられていると思われる。また、二つのタイプにおいて「手先の不器用さ」「特定のものが好き」が男児の割合が高く有意差が認められたことから男児特有の行動特徴として考えられた。